



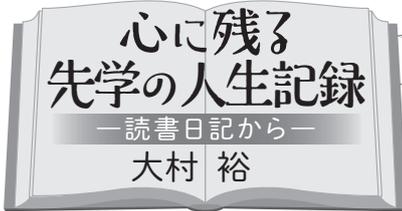
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.213  
2021.6.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第22回

## 『近代日本思想大系 9 丘浅次郎集』

(筑摩書房 1974年)

縄紋学の父・山内清男や、これまでの連載で紹介した大杉栄・田中美知太郎に多大な影響を与えた生物学者・丘浅次郎(1868~1944年)の著作集である。丘は、上記のような一流の人士に尊敬されていた大変な学者であるが、世間一般の認知度は低いようである。それは、彼が伝記の類を嫌っており、「人間は業績の内容によって評価されるべきで、それと関係ない私生活のことなどことさら持ち出す必要はない」と考えていたため、自身に関わる伝記や評伝が書かれることを拒否していたことにも一因があるように思われる。私のように、「研究者の業績とその人物とは密接なかかわりを持っている」という問題意識を持つものにとって、極めて残念な次第である。ここでは、この書籍に収載されている「落第と退校」という丘自身のエッセイと、巻末に収載された筑波常治の「解説」を参照して丘の生涯を復元してみたい。

丘浅次郎は1868年、遠江国磐田郡掛塚町において父秀興・母ゆきの次男として出生。生家は土地の旧家であり、古老たちは後年まで浅次郎のことを「高塚の坊さま(坊ちゃん)と呼んでいたという。「高塚」とは「丘」の本来の苗字である。父秀興は明治維新期の改姓の自由化が行なわれた際、「高塚」は字画が多くて面倒なので、同じ意味の「丘」に変えてしまったそうである。形式に捉われない浅次郎の性格は、父の影響を強く受けているのかも知れない。それはともかく、高塚家(丘家)はかなり名家であったようであるが、浅次郎は彼の家の系図や位牌をすべて川に捨ててしまったとされている。父は造幣局の高官であったし、親戚筋には酒道家や地方銀行の経営者などがあり、素封家の一軒であったのは確実であるが、浅次郎はそうした「家柄」にこだわること拒否する性格であったようである。

ちなみに父秀興は江戸時代生まれなのに、英語に熟達しており、浅次郎は漢文の素読を学ぶ代わりに6歳か7歳の時より父から英語の手ほどきを受けていたという。また、父の職場は大阪の造幣局であったので、そこに勤める外人技師の子どもたちと一緒に遊んでいた。12歳になってからは旧制中学に相当する大阪英語学校に入学。ここでは、地理でも歴史でも代数でも皆英語の教科書を使い、教師も外国人が多かったという(丘の述懐)。浅次郎は「語学の天才」と言われていたが(12か国語以上に通じており、万国共通語として「ジ・レンゴ」という国際語を自ら作っている)、その基礎はこうした境遇の中ではぐまれたと筑波は解説している。生まれた家庭に育った浅次郎ではあるが、11歳の時に妹が事故死、13歳の時には父が現職のまま官舎で病死(脚気)、これと前後して母も亡くなっており、16歳の時には兄も病死して浅次郎は孤児となってしまふ。この相次ぐ肉親の急死が、浅次郎の人生観(独立独歩、他人を絶対にあてにしない)・思想の発展に、極めて大きな影響をおよぼしたであろうと筑波は書いている。さて、寄る辺のない浅次郎少年ではあったが、教師の支援もあったのであろう。1882年、首尾よく東京

大学予備門(後年の旧制高等学校)に入学する。ここの第一年級では、日本史の成績が極端に悪く、本来ならば落第させられるところ、歴史の先生が「歴史一科だけで落第させるのはかわいそう」である、として特に救ってくれたという。しかし第二年級では西洋史で百点満点中15点や20点を取ってしまい落第。翌年も西洋史で及第点を取れず落第となった。二年連続で落第すると退校になる規則であったので、浅次郎はどうとう退校させられてしまったのであった。歴史関係科目の成績が振るわなかったのは、「誰が何月の何日に死んだとか、何所の戦争が何月何日に始まったとかいふ様な年月日を暗唱すること」が嫌だったからであるという。丘は、原因と結果の因果関係を考察するような歴史ならば、「私は大好きである」と弁解している。筑波によれば、丘は、「教える側があらかじめ、いくつかの教条を決めておき、それを頭からいやおうなく、生徒に覚えさせて、「生徒の頭に、ものごとを疑う習慣をつけさせず、信じることだけを強制する」「他力教育」を徹底的に批判していたという。当時の修身教育や歴史教育はその最たるものであろう。この考えは戦前の体制側から見たら大変な危険思想である。丘の教え子の高桑良興は「先生は一歩あやまられたならば、直ちに特高の黒枠に入り」「社会を追放せられしかも知れなかった」と証言している。アナキストの大杉やその信奉者の田中美知太郎・山内清男が尊敬した所以であろう。

予備門から「放逐」された後、大学の選科に入学。本科生(予備門修了生)と同じことを学んだものの、学内において種々差別を受け、卒業後も「学士」の称号はもらえず、かなり不愉快な思いをしたらしい。丘は、世間や学校当局が本科生を尊重するのは、食わず嫌いをせずによく我慢してきたことを、誉める意味かも知れない、と皮肉を書いている。選科修了後、ドイツに私費留学。ライプチヒ大学のロイカルト教授等のもとで研鑽を積み、見事「ドクトル」の学位を取得する(しかも最高の評価を受けたという)。しかし日本では外国の学位など随分いかかわしいものがあるという理由で評価されなかったのであった。帰国後一時山口高等学校の教授に就任。その2年後には東京高等師範学校の教授となって62歳の定年までここで仕事をする。学術面では「ホヤ」と「ヒル」の研究に従事。これが当時の学界で第一級の内容と評価され、1925年には帝国学士院会員に選ばれている。当時の東京高等師範学校は、国家から研究成果を期待されておらず、丘の研究室は「貧弱な納屋の如き」ものであったという。助教授も研究助手もいない悪環境の中で、たった一人黙々として研究に勤しむ一方、『進化論講話』(開成館1904年)など多数の啓書書を執筆したのであった。

丘浅次郎博士の性格・思想・経歴・境遇・研究態度などの多くの面が、私には山内清男や田中美知太郎のそれと重なって映るのである。やはり学問と人とその生涯は切り離して理解はできないと私は思っている。

\*巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第22回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第206回) 高橋美鈴 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第19回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「遊動する旧石器人」 高見俊樹 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第19回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 19. カナダ日本研究学会の誕生：JSSACからJSACへ

1987年の10月9、10日に、カナダのエドモントン市にあるアルバータ大学の経済学部主催で、戦後の日本社会の政治・経済・社会的変容に焦点を当てた「近代日本カンファレンス」(Modern Japan Conference)という表題のカンファレンスが開催された。当時は、日本経済の「バブル景気」が話題になっていた頃で、カナダの社会学者たちもそれぞれの専門分野の枠組みの中でこれに関連するテーマに取り組み、研究結果をそれぞれの学会で発表していたので、その人たちが一堂に会して話し合う機会を作ってみようという計画だったようだ。国際交流基金、日本大使館、総領事館の支援を得て、カナダ各地から政治、経済、人文地理、社会学、人類学など社会科学各分野の研究者約20名を招聘したのに加えて、日本カナダ学会から社会学者の小浪充教授をゲストスピーカーとしてお招きし、それに地元のアルバータ大学から10名以上の参加があって、日本大使館、総領事館、カナダ外務省、アルバータ州政府の代表者も入れると約50名の集まりとなった。そのような「社会学者」の集まりに考古学者がどうして紛れ込んだのかとおもわれるかもしれないが、前にもふれたように、北米では先史考古学は総合人類学の一分野とされているので、マギル大学で日本に関する研究をしている人類学者の代表として私が招かれたのだろう。モントリオールからはもうひとり、フランス語系のモントリオール大学から同じく人類学のバーナード・ベルニエ教授が参加されていた。

招待された20名の日本研究者はこれが初対面という場合がほとんどだった。研究発表やそれに対するコメントが進行するにつれて明らかになったのは、多くの研究者が同様のテーマに、異なった角度から取りこんでいるということ、そしてそれらの成果を補足しあえば更に興味ある結果が得られるだろうということだった。そのような学際交流を通してカナダの社会学者による日本研究を促進するためにも、このたびのような集りを定期的に設ける機構を作ろうという気運がもりあがって、第二日の最後のセッションでカナダ日本研究社会科学会(Japan Social Sciences Association of Canada)を創設することに意見の一致をみた。新しい学会の分野は政治、経済、人文地理、社会学、人類学と1945年以降の現代史。学会の主な目的はエドモントン会議のようなカンファレンスを各地の大学持ちまわりで定期的で開催することで、その第一回大会はモントリオールで開催するということになった。少し離れた席にいられたモントリオール大学のベルニエさんが「お手伝いしますよ」と声をかけてくださったので、ベルニエさんと共同で大会実行委員をお引き受けすることにした。その時の決議では二年後ということだったが、それではあいだが開きすぎるといった意見がでて、モントリオール大会は一年後の1988年10月に開催されることになった。一年間で準備するのはかなり忙しかったが、国際交流基金、カナダ外務省からの援助にくわえてマギル大学の人文学部、経営学部、大学院など各種機関からも支持を得て、第一回会合は参加者64名の盛会だった。ちなみに1988年当時の会費は年額10ドル、会員総数は48名だった。

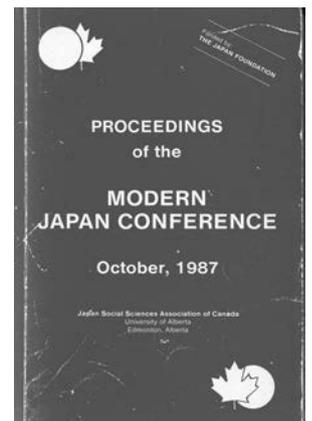
学会創設の際、学会の名称も、会則の草案にも「社会科学」を強調し、「現代史」を1945年の終戦以来と限定するなど、専門分野を細かく設定したのは、当時のカナダでの日本研究の現状に対する不満の表現でもあった。当時カナダには1968年に発足したカナダアジア学会(Canadian Asian Studies Association、略してCASA)があったが、南アジアなどの研究者に圧倒されて日本研究者は影がうすく、しかも日本関係の発表は日本語教授法、日本文学、歴史、宗教などに限られていて、政治・社会・経済などに関する研究発表は

ほとんど皆無だった。エドモントンの「近代日本カンファレンス」のように学際的な広場で意見を交換するような機会はなかったので、エドモントン会議の雰囲気を見ようという意向で、会員の専門分野を細かく規定したのだが、まもなく参加部門を広げる動きがはじまった。まず1988年の第一回大会で、比較法学、社会心理学、教育学を加えようとの提案を受け入れた。さらに1989年にトロントのヨーク大学で開かれた第二回大会では言語教育も文学の研究も社会的背景を考慮するから社会科学と無関係ではないというもっともな論議で、結局、あらゆる分野の研究者を歓迎することになり、会の名称も、「カナダ日本社会科学会」から「カナダ日本研究学会」(Japan Studies Association of Canada)に変えることになった。いずれの場合も、会の名称はながいので、頭文字をつなげて、前者はJSSACと呼び馴らしており、「ジエイサク」と発音していたのが、新学会では「S」が一つおちて「JSAC」になった。但し発音はやはり「ジエイサク」でかわらない。上で触れたCASAは2018年に解散したそうだが、JSACの方は今も大いに健在、多いときは年次大会に200名以上の参加がある。2021年現在の会長はサクカチュアン大学の政治学者、キャリン・ホルロイド博士、学会事務はヨーク大学の太田徳夫先生が管理してくださっている。

このような次第で、カナダの日本研究学会には当初から関係しており、会則が発行するまでの臨時会長役を1988-90の二年間を務めた後、1999-2000年と2004-2007年に2度会長を務めさせていただいた。本会の創立30年祝った2017年には「本学会への生涯貢献賞」の第一号をいただく光栄に浴したが、創立時からの生存者は数すくなくなっている、過去30年間カナダでの日本研究の発展に努めてきた研究者一同を代表して「貢献賞」をいただいたのだとおもっている。その数少ない生存者のひとりがこの写真で私に賞状を渡してくださっているブリティッシュコロンビア大学のエッジントン教授、1988年のモントリオールでの第一回会議では筑波学園都市の建設について人文地理学の見地から研究発表をしていただいた。



▲カナダ日本研究学会への生涯貢献賞を2017年に受賞



▲1987年の「近代日本カンファレンス」の論文集

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
1974年	ハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員：2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## リレーエッセイ

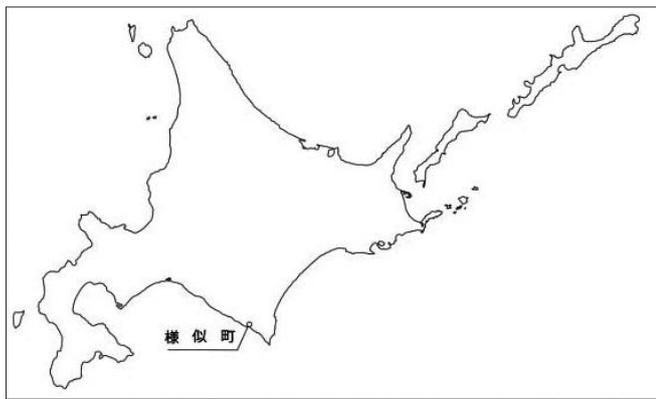
### マイ・フェイバレット・サイト 206

## 冬島遺跡 ～北海道様似郡様似町

高橋 美鈴

様似町は北海道南部、太平洋沿岸のほぼ真ん中に位置しています。地勢は、北東に日高山脈が悠然と横たわり、東部には日高山脈支稜線西南端に位置するカンラン岩を母体とするアポイ岳(810.5m)やピンネシリ(958m)が聳えています。南西部は太平洋に面し、海岸線まで何面かの段丘地形が発達しています。また、海岸線の多くは急峻な崖が続き、日高耶馬溪と呼ばれる約7kmにおよぶ海食崖がみられます。

今回ご紹介する冬島遺跡は、様似町市街地から東へ6km、冬島川とポンサヌシベツ川に挟まれた海岸段丘上標高38mに位置する続縄文文化期初頭の遺跡です。遺跡のすぐ背面にはアポイ岳があり、眼前いっぱいには太平洋が広がる景観は圧巻です。



▲位置図

様似町教育委員会では、平成26年度から令和2年度に掛けて冬島遺跡の調査を実施しました。元々の調査のきっかけは、町内の埋蔵文化財の普及活用を目的とした体験発掘でした。私は平成27年度から調査担当となり、体験発掘事業を兼ねて町民の方々と4㎡ほどを調査し、半日で埋め戻す予定でした。しかし、調査を開始するとおびただしい数の黒曜石フレイクや土器片、魚骨



▲平成28年度調査写真

や獣骨が調査範囲の至る所から出土し始めました。なんとか測量と取り上げを繰り返し、少しずつ掘り進めていきましたが、そのなかで、体験発掘の参加者が1点の骨角器を見つけました。

よく見ると、釣針の先であることがわかり、日高管内では2例目、様似町では初めての出土となりました。まさかの遺物の出土にとっても興奮したのを憶えています。

この結果を踏まえ様似町教育委員会では、本格的に冬島遺跡の調査を実施することとしました。

調査の主な目的は、①遺跡の年代、特徴を明らかにすること、②遺跡の残存範囲を確認することでした。

令和2年度までの調査によって、①遺跡は続縄文文化期初頭

の単純遺跡である可能性が高い、②複数単位の獣骨・魚骨の廃棄層が広範囲に分布する、③獣骨・魚骨層の周辺に土坑・石組炉などの遺構がまとまる、④遺跡は台地西側の縁辺部まで広がるが東側は近年の削平で消失している、などが明らかになりました。

特に、令和元年度調査では、獣骨・魚骨層が南向き斜面に沿って厚く堆積する様子が認められました。

遺物は、土器・石器のほか骨角器、石製品、コハク玉などが出土し、動物骨ではマダラやヒラメなどの魚類、イルカ、クジラ、オットセイなどの海獣の骨や歯、エゾシカなどの陸獣の骨も多く見つかっています。特筆すべきは、交易品と思われるイノシシが出土していることです。

遺構は獣骨・魚骨層の下から砂の敷き詰められた二列の配石が土器集中と共に検出され、さらに掘り下げると配石下位から石組炉が確認されました。

このことから、①石囲い炉を伴う竪穴住居、②竪穴住居廃絶後に整地、③列状の石を設置、④獣骨・魚骨層の形成という過程が見えてきました。

眼前いっぱいには太平洋が広がり、沖を見渡せば魚の群れが見え、すぐ脇を川が流れ、背面に聳えるアポイ岳がランドマークとなって漁に出た際の目印になる、そんな冬



▲令和元年度調査写真

島遺跡の立地は、海洋資源を大いに利用した続縄文文化期の人々たちにとって理想的だったのだと思います。

また、北海道太平洋沿岸部の貝塚を伴う遺跡の調査事例は、西の噴火湾沿岸地域か東の釧路市を中心とする地域が主であり、太平洋岸中央部に位置する冬島遺跡でこのような貝塚(獣骨・魚骨層)が確認されたことは、続縄文文化期における文化の伝播を考える上でも重要な成果です。

最終的に、平成27年度から足掛け6年間の調査で総発掘面積は72.05㎡、出土遺物は6万点以上となりました。

私の乏しい調査経験でこれほど濃密な遺跡を掘ることは簡単なことではなく、たくさんの先輩方のお力を借りました。小さな町の1人埋文担当の自分が、先輩方と一緒に調査をし、時には叱咤され、ごく稀に褒められる…こんなに成長できる調査はもう経験できないかもしれません。

今後は、遺跡から大量に出土した魚骨や骨角器を元に海の利活用・漁猟方法を検討し、地域研究として当町の歴史に反映させることで適切な冬島遺跡の保存活用を進めていく予定です。

#### 参考文献:

様似町教育委員会2018「様似町冬島遺跡発掘調査報告」[様似郷土館紀要]1  
 様似町教育委員会2020「平成30年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」[様似郷土館紀要]2  
 様似町教育委員会2020「令和元年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」[様似郷土館紀要]2  
 様似町教育委員会2021「令和2年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」[様似郷土館紀要]3

\* 次回のマイ・フェイバレット・サイトは中塚風沙さんです。

## 考 古学者の書棚

## 「遊動する旧石器人」先史日本を復元する1

稲田孝司 著／岩波書店(2001)

高見 俊樹

## 1 風を追う

「日本列島で旧石器時代の歴史をしらべるのは、風を追うのに似ている。だいいち主人公の姿がはっきりしない。彼らが何を食べたのか、食料の具体的な証拠がほとんどのこっていない。寝起きた住居の跡も、死後の墓も、確実なものがきわめて少ない。暖をとり、料理をし、野獣から身をまもったはずの焚き火の跡さえ定かでない場合が多いから、心細いかぎりだ。人間の暮らしに必要なものをあれこれ並べたてていけば、ないないづくしになってしまう。まるで空をつかむような話だ。だから、旧石器時代をしらべるのは風を追うような感じがするのである。(…中略…)丹念に、根気よく石器の接合関係を追いかけて旧石器人の動きをとらえることができたときは、一万年の歳月が吹っ飛んでしまう。旧石器人がすぐ目の前を悠然と右から左へ歩いていくような感じさえるのである。枯れ葉の並びから、渦を巻いた一陣の風の動きを読み取ることができるのに似ているではないか。」

本書の冒頭で、著者の稲田孝司氏はこのように述べ、旧石器時代の研究のことを「風を追う」という言葉に託している。まさに言い得て妙である。旧石器人も旧石器時代研究もとらえどころがない「風」のようにさえ感じられることには同感だ。しかし凡庸な私と違って、著者は時としてその「風の尻尾」をつかまえている。そのことを一般向けの概説書において、しかし高らかに宣言しているのが本書である。

## 2 「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」の衝撃

本書を紹介する前に、稲田氏と言えばどうしても触れておきたい業績がある。1969年に発表された論文「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」(『考古学研究』15-3)である。私にとっては、学生時代に読んだものの中で最も感銘を受けたのがこの論文だった。本論は、尖頭器という器種の出現と尖頭器を含む石器群に内在する「構造」に着目し、その技術基盤の変動が日本列島に生じた後期旧石器時代において果たした歴史的な意義について論じたもので、石器研究を基礎として、旧石器時代における人間集団のあり方から社会的背景までも見据え、石器群の変遷に見られる構造変化が、やがて日本列島に独自の縄文文化成立の土台を形成したという、壮大な歴史叙述が展開されている。この論文が、その後の旧石器時代研究の方向性に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。私自身にも、列島に生きた旧石器人集団について初めて具体的なイメージが沸き、考古学や石器研究はここまで出来るとの期待を抱かせてくれた論文でもあった。稲田氏の豊かな発想と卓越した論理性や分析力は、この時すでに旧石器人の人影を捉えつつあったに違いない。

## 3 遊動、植民、行動軌跡、とは

さて本書『遊動する旧石器人』で稲田氏が提出している概念に、「遊動」・「植民」・「行動軌跡」がある。稲田氏が「風を追い」、それをつかもうとする試みのキーワードである。

「遊動」とは元々は動物行動学の用語らしい。ゴリラやチンパンジーの群れが、ある範囲の領域のなかを餌を求めながら毎日寝場

以前ご執筆いただいた忍澤成視氏が第46回藤森栄一賞を受賞されました。心よりお祝い申し上げます。(受賞記念講演等は新型コロナウイルス感染予防対策のため延期となりました。)

YouTubeの種子島みなみチャンネルにて忍澤氏の記録映像「幻の貝オツタノハ調査に密着!」が配信中です。

所を移すことを遊動と呼ぶことが筆者により紹介されている。ただし旧石器人の「遊動」では、数日から数週間とは同じキャンプにとどまっただろうというのが氏の推定である。一般に旧石器時代人の暮らしは「移動生活」と呼ばれることが多かった。これは縄文時代以降に想定される「定住生活」の対立概念でもあり、旧石器時代に本格的定住があったとは思われないことから、多くの研究者も「移動」という用語を使ってきた。しかし「移動」と言われてもなかなかその実態が見えない。一方の「遊動」は考古学では聞きなれない用語ながら、旧石器の人々が列島内の広範囲を舞台に生き生きと暮らしていた様子が不思議と目に浮かんでくる。本書では、列島内の各遺跡に遺された多くの事例を検証しながら、その暮らしやキャンプでの生活実態に迫ろうとの意欲的試みが続く。筆者によれば旧石器時代遺跡でしばしば認められる石器群の環状ブロックは、「遊動する集団の円陣キャンプ地」であるという。そして遊動生活の理由は、狩猟採集活動による食料確保と消費した道具(石器)を補充するための石材の採取である。旧石器人たちは、広範囲に点在する多くの石材採取地を熟知し、回帰遊動していたのである。

一方「植民」はもっと遠距離に及ぶ移動を指し、「ある程度まとまった人間集団が、従来の居住地を捨て新しい生活領域を求めて移住すること」と定義され、遺跡においては遠い別地域の特徴を持つ異質な石器群が、飛び地のように発見されることで認識される。人類の地球規模での拡散の背景でもあると説明されている。筆者は近現代の「植民地」ではなく、古代地中海世界やヨーロッパ中世の「植民」に近いイメージをもってこの用語を選択したようである。なるほど「遊動」と対にして使うことで、それとは動機異なる長距離移動の様子がイメージできるのではないか。

もう一つ稲田氏の定義する大切な用語に「行動軌跡(または「行動の残像」)」がある。これは旧石器時代遺跡の石器群分布や礫群・炭化物集中などを指しており、広い意味での「遺構」とは区別しようとしている。つまり縄文時代の遺構のような不動産ではなく、遊動生活のなかのごく短い時間帯の中の出来事の痕跡を示しているというわけである。確かにこう呼ぶことで、私たちが旧石器遺跡を見る目にはより具体的な視点が要求される。稲田氏はつくづく言葉選びの天才である。

## 4 風立ちぬ、いざ生きめやも

稲田氏の考え方や分析を、具体的な遺跡の調査事例と照らし合わせながら確認できる好書がある。氏の長年のフィールドである岡山県の恩原遺跡群の調査成果を報告する『旧石器人の遊動と植民-恩原遺跡群-』(シリーズ遺跡を学ぶ065)(新泉社2010)である。稲田氏が「植民」の存在を確信した象徴的なエピソードや、精緻な石器群分析の成果として示される旧石器人の行動と生活の復元は圧巻である。稲田氏の業績と言葉に導かれながら、私たちと一緒に旧石器人の生きた証し、風の尻尾をつかまえてみたいものである。



## アルカ通信 No.213

発行日 2021年6月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp